

# 漢詩神奈川

第 25 号

神奈川県漢詩連盟  
事務局

神奈川県海老名市  
浜田町16-9

TEL-FAX  
046-233-7641

発行人 三村公二  
編集人 高津有二

## 令和元年を迎えて

神奈川県漢詩連盟会長 三村公二

五月二十九日の総会で新役員が承認された。又、諸般の事情で急遽お願いした市川桃子先生のご講演も大盛況であった事も誠に喜ばしい出来事であった。

平成時代の神漢連は会員数七十八名からスタートし、約二百三十名と大きく成長したが、令和時代には諸先輩が築かれたこの輝かしい足跡を引き継ぐと同時に、新しい考え方・手法を加味して更なる発展を目指していく事になる。



三村公二会長

「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」は令和になっても変わらぬ神漢連のモットーであるが、最近この世の中、楽しむのではなくて、中に入って面白がることよ(樹木希林)という言葉が目にとまった。

「世の中」を「漢詩」と置き換えれば、そのまま「漢詩で遊ぶ」の考え方に当てはまる。今年二月、三月の二回に分けて、サークルの講師をしている方々を対象に後藤淳一先生に指導者教育講座をお願いした。与えられた詩題に基づいて作詩してその添削を受けた事と、あらかじめ提示された詩を各人が添削し、その添削の適正さを先生から指導を受けるという内容であった。受講者が一様に感銘を受けたのは先生がパソコンで「搜韻」をベースに講義されたことである。関係者のご努力でようやく五月末の発行にこぎつけた神漢連叢書「七言絶句」から一步・注釈(上)の編集過程でも最も頼りになったのは「搜韻」等の中国ネットの情報であったことを重ね合わせる、これからの一つの方向性を示唆しているように思う。同じ観点から、「神辞海(パソコン漢詩)」の若い人への普及にも期待したい。二期目を迎え、このような新しい流

れをよく見極めつつ、神漢連の今後の在り方を皆様方と一緒に考えていきたいと思つてゐる。



総会での三村会長挨拶

総会開催にあたり、窪寺啓先生から左記の玉韻を頂きました。尚、総会後の懇親会では住田相談役が吟じて出席者に披露した。

賀第十四回神奈川県漢詩連盟總會開催

臨海公園花影盈 臨海公園花影盈

薔薇五彩郁芳清 薔薇五彩郁芳清

令和初夏天晴處 令和の初夏天晴るる処

堪喜逾堅鷗鷺盟 喜ぶに堪えたり鷗鷺の盟逾堅きを

# 連盟の行事

## 第十四回神漢連総会開く！

事務局長 高津有二

令和になって初めての第十四回神漢連総会が五月晴れの五月二十九日、午後一時から神奈川近代文学館ホールにおいて、窪寺啓先生、市川桃子先生のご臨席を賜り、会員約六十名が出席して開催されました。

総会では、三村会長から本年度の活動方針として「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」の連盟のスローガンを踏襲しながら、会員の詩力向上を図るとともにパソコン、スマホを活用した活動も支援していく事が示されました。

次いで、事務局から活動報告、今後の活動計画、決算報告、予算計画(本頁中段参照)規約改定案、人事案(本頁下段参照)が提案され、承認されました。総会後の講演会では市川桃子先生の「李白『白髮三千丈』」の講演があり、会員以外的一般参加者を含めて総勢一三〇名を超える聴講者がありました。

(講演内容は、本紙四頁、五頁を参照) また、発刊直後の神漢連叢書「七言絶句(ここから一歩(上))」の頒布、販売を実施しました。

### 平成三十年度決算・令和元年度予算

平成30年度田原基金決算			令和元年度一般会計予算案			平成30年度一般会計決算		
区分	費目	繰越金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額
収入	前年度繰越	1,000,000	収入	前年度繰越	228,015	収入	前年度繰越	302,284
支出	七絶編集他	53,425		年会費	553,400		年会費	503,000
	指導者研修	30,000		行事費	555,000		行事費	373,500
残	次年度繰越	916,575		その他	202,200		その他	596,280
令和元年度田原基金予算案			経常費	460,000	経常費	766,227		
収入	前年度繰越	916,575	支出	行事費	646,000	支出	行事費	506,652
	七絶頒布等	525,000		その他	286,000		その他	274,170
支出	七絶印刷研修等	450,000		残	次年度繰越		146,615	残
残	次年度繰越	991,575						

### 令和元年度人事

☆理事

玉井幸久 石川省吾 古田光子  
岡田泰男 横山真吾 桜庭慎吾

☆執行理事

三村公二(会長) 水城まゆみ(副会長)

中島龍一(副会長) 高津有二(事務局長)

香取和之(事務局次長) 室橋幸子

川上修己 飯島敏雄 瀧川智志

新井治仁 大森冽子 山口幸雄

牛山知彦(新任、九詩期会)

☆監事

松井秀人 三上光敏(新任、金星会)

☆特別相談役

岡崎満義

☆相談役

住田笛雄

☆顧問

石川忠久 窪寺啓

☆運営委員

浅岡清明 池上一利

家吉幸二 犬飼堯 岩波弘道

芝公男 細江利昭 篠崎吉之

鈴木正敏(新任、三水七步会)

安田茂(新任、干支会)

(参考)

☆竹林舎  
玉井幸久 飯沼一之 城田六郎  
古田光子 住田笛雄 桜庭慎吾

# 十三期初心者入門講座と 受講者の声

恒例の漢詩鑑賞と実作の入門講座が今年も四月十六日(火)を初回として開催されました。参加者は二十四名。参加者は既会員の紹介が多く、新聞、HPにもよっている。この講座に興味を示してく



講師の話に熱心に聞き入る13期生

れる方々はいつも同じように中高年者である。尚、神漢連の会員数を増やそうとする試みの一環であり、これには既会員皆さんの協力が欠かせない。

全五回の講座内容を記し、次年度の参加者に期待したい。

第一回 漢詩鑑賞Ⅰ、漢詩概論と七言絶句の規則

第二回 漢詩鑑賞Ⅱ、漢詩の規則と作詩の指導

第三回 漢詩鑑賞Ⅲ、七言絶句の指導  
第四回 漢詩鑑賞Ⅳ、卒業詩の作詩指導

第五回 漢詩鑑賞Ⅴ、卒業詩の講評

以上の五回の漢詩鑑賞は神漢連の役員による各自の感動の詩、特に唐・宋の詩の紹介と解説である。テキストは「詩語・完備だれにでもできる漢詩の作りかた」呂山太刀掛重雄著を用いている。(川上 修己)

## 入門講座を終えて

十三期 竹村文夫

「初心者入門講座」全五回の講義は、各先生大変わかり易い説明であり、後は「自分で詩作してみるしかない」。焦らず、楽しみながら、毎回詩作のコツを先生、そして仲間から互いに吸収し合って、向上していきたい。

私は湯島聖堂の住田先生の詩吟講座に入会し、そこで神漢連の初心者講座があることを知り、大宮から参加致しました。今年後期高齢者となり、令和の新時代チャレンジ項目として選択しました。今まで私にとって、漢詩とは中国及び日本の歴史上の人物の詩であり、読み、書き、吟じてきました。

今回初めて二、三人毎の個別ご指導により、愚作ですが漢詩らしきものができました。自分にとっては漢詩を作ることなど、不可能で考えたことありませんでした。それが何と、奇跡、急に自分も歴史上の漢詩人になったような錯覚を憶えました。

孜孜晩学の十三期仲間では、互いに漢詩で余生を楽しみたい。先生・先輩の皆さんのご指導よろしくお願い致します。

## 指導者養成講座開かる

県連として詩力の向上、及び漢詩の作り方を指導する人材を増やすために、指導者養成講座を二日にわたり開催しました(二月十七日、三月十七日)。講師は二松学舎大学の後藤淳一先生、受講者は神漢連三村会長以下十一名。

講座内容は、各生徒が作成した課題詩について、互評と先生の講評を受け、さらに漢詩の添削の仕方の指導を受けました。質疑応答が多くあり、的確で斬新な回答で活発な授業となり、かつ有意義な講座でした。

先生の主な指導事項としては、まず作詩における起承転結の構成において、結句の下三字に向かって収束するように、前の三句を誘導してストーリーを作ること。そして何よりも独りよがりではなく、詩の言わんとする内容が読者にとって、小さな感動とか面白さを感じさせることが必須である。そういうものが詩であります。説明や報告では駄目です。つぎに、当てはめる詩語は雅と品がある上に、インパクトのある言葉を選ぶことである。

また、パソコンを作詩に役立てるため「検索」を駆使した用例の検索方法を指導されたことはおおいに参考になりました。

(中島龍一)

# 李白「白髮三千丈」

## ―市川桃子先生講演会―

百二十名を超える聴衆を魅了!  
(令和元年五月二十九日神漢連総会后)

五月二十九日、神奈川近代文学館において漢詩講演会が催され、神漢連の会員および一般の人を対象に百三十名以上参加していただきました。市川桃子先生は李白の詩を読み解いて、李白の誇張した数字表現についての解説をされました。

「白髮三千丈」の表現について、秋浦歌十七首ともう一首から、李白の心の内を先生が独自に想像してみたものです。

### 秋浦歌十七首 其十五

白髮三千丈 白髮三千丈

縁愁似箇長 愁に縁りて箇くの似く長し

不知明鏡裏 知らず明鏡の裏

何處得秋霜 何れの処か 秋霜を得たる

【訳】白髮がなんと三千丈、愁いのためにこのように長くなった。明るい鏡の中の自分を見ても、いったいどこから秋の霜がこんなに頭に降ってきたのか分からない。



市川桃子先生

この作品が書かれた時は、七、五四年、李白五十四歳のころと言われている。秋浦県は、長江の近くの池州

(今の安徽省池州)にあり、秋浦水という川が流れている。

同じところ同じ場所で詠われたつぎの詩は秋浦とはどのような場所かを詠っている。

### 秋浦歌十七首 其一

秋浦長似秋 秋浦長えに秋に似たり

蕭條使人愁 蕭條として人をして愁えしむ

客愁不可度 客愁 度る可からず

行上東大樓 行きて上る東の大樓

正西望長安 正に西に長安を望む

下見江水流 下に見る江水の流れ

寄言向江水 言を寄せて江水に向かう

汝意憶儂不 汝の意 儂を憶うやいなや

遙傳一掬淚 遙かに伝う一掬の涙

爲我達揚州 我が為に揚州に達せん

【訳】秋浦の地は、その名のように、いつも秋のようだ。寂しい光景が人を悲しませる。旅の愁いは、はかりしれないほどで、そこで東の大樓山に登ってみた。真西にある長安の方角を眺め、下を見れば河の水が流れていく。河の水に話しかけてみる、「お前は私を気遣ってくれるかい? 遙か遠くに、ひとすくいの涙を送るから 私のために、揚州まで届けてくれないか。」

そして右の詩は曾て、玄宗皇帝に仕えた長安を思い、家族のいる揚州を思っている。

秋浦歌其十二では、秋浦の湖面は平らかに、月の光を幸いに花見の酒舟としよう、と詠う。

其十一で船から見える景色、兩岸の絶壁と急流を、其九で、絶壁に自分の詩を書いておけば百年千年後に刻字のうえに美しい苔が生じるだろうと思ひ、其八で、岩は空にのしかかり、木の枝が川の水をかすめている、としている。其三で、ここには世にも珍しい美しい鳥がすんでおり、雉は自分の姿が水に映ることを羞じると詠う。また其五で、白い猿が月下で親子で水を飲んでるとし、其十二で、人々の生活を紹介し若い男が菱を摘む女の歌を聴くとし、其十四で、鉞山で銀や銅を溶かす溶鉞炉の火が夜も赤々と照り、顔をほてらせた若者が詠う歌が川に響きわたる。其十六では、魚を取る漁師と網で鳥を生け捕りにしようとする妻子のことを、其十七で、雲の中にある山寺から朗々と僧の声が聞こえる。

このように李白が秋浦の風景を詠っていることを理解してから、其十五に冒頭の「白髮三千丈」の五言詩を読み返してみる。

この詩の三句に「明鏡」とありこの解釈は今までの詩を考慮すると当然、水鏡つまり川や湖の水に照す鏡ということになる。同じころの詩にも明鏡がある。

### 「清溪行」

清溪清我心 清溪我が心を清くす

水色異諸水 水色 諸水に異なる

借問新安江 借問す新安江

見底何如此 底を見れば何ぞ此の如し

人行明鏡中 人は行く明鏡の中

李白

鳥度屏風裏 鳥は度る屏風の裏  
 向晚猩猩啼 晩に向かいて猩猩啼き  
 空悲遠遊子 空しく遠遊子悲しむ

【訳】清溪の清らかな水は私の心も清くする。水の色はほかのどの川の水とも異なる。清らかさで名高い新安江でも、底をのぞき込めば、このようではないだろう。人は明るい鏡の中を歩いていく。鳥はそびえる山々の屏風の間を飛んで行く。暮れに猩猩が啼いて、遠く旅に出た者は悲しくなってくる。

つまり、其十五の「不知明鏡裏」の明鏡は、水鏡である。李白は澄んだ水に我が身を見たのである。

第二句の「縁愁似箇長」、この愁いがどういうことかは、次の詩からも知ることが出来る。

秋浦歌 其二

秋浦猿夜愁 秋浦猿夜に愁う  
 黄山堪白頭 黄山白頭に堪えたり  
 青溪非隴水 青溪隴水に非ざれども  
 翻作斷腸流 翻つて断腸の流れと作る  
 欲去不得去 去らんと欲して去るを得ず  
 薄遊成久遊 薄遊久遊と成る  
 何年是歸日 何れの年か是れ帰る日  
 雨淚下孤舟 涙雨りて孤舟に下る

【訳】秋浦では夜になると猿が悲しい声をあげ、黄山を見上げれば、人は白髪になりそうだ。青溪は悲しみの音を立てるといふ隴水ではないけれど、やはり断腸の音を立てて流れていく。去ろうとす

少しの間の旅だと思っていたが、ずいぶん長く旅を続けることになった。いつになったら帰る日が来るのだろうか。涙が降りそそぎ、一人ゆく小舟に落ちる。

李白は突然の老いの自覚をして詠っている。

秋浦歌 其四

兩鬢入秋浦 兩鬢 秋浦に入り  
 一朝颯已衰 一朝颯として已に衰う  
 猿聲催白髮 猿声 白髪を催し  
 長短盡成絲 長短 尽く糸と成る

【訳】秋浦に入ってからのこと、鬢の毛(顔の両横の髪)はある朝いつぱんに乱れて細くなった。猿の悲しい鳴き声がいつそう髪を白くし長いのも短いのもすべて絹糸のようになってしまった。

また李白は五十四歳になって、功績も無く、位も無い自分を悲しむ。

秋浦歌 其七

醉上山公馬 酔いて山公の馬に上り  
 寒歌甯戚牛 寒くして甯戚の牛を歌う  
 空吟白石爛 空しく 白石の爛たるを吟ずれば  
 淚滿黑貂裘 黒貂の裘に涙満つ

【訳】酔っぱらって山公のように頭巾をさかさにかぶって馬に上り、寒いときには甯戚のように牛の角をたたいて歌う。しかし「白い石が光っている」と甯戚のように歌っても、どうにもならず黒貂の上着は涙でいっぱいになる。

そして美しい風景に潜む孤独を詠っている。

秋浦歌 其十

千石石楠樹 千石石楠の樹  
 萬萬女貞林 万万女貞の林  
 山山白鷺滿 山山白鷺満ち  
 澗澗白猿吟 澗澗白猿吟す  
 君莫向秋浦 君秋浦に向かう莫れ  
 猿聲碎客心 猿声 客心碎く

【訳】幾千もの石楠の樹、幾万もの女貞の林。どの山にも白鷺が群をなしており、どの谷川でも白猿がうたう。君 秋浦に行つてはいけない。行けば猿の声が旅人の心を砕くだろう。

結局、この有名な「白髮三千丈」で李白は、何を言いたかったのだろうか。唐代では、一丈は約三メートル。三千丈ならば九キロメートル。李白は、なぜ、このような誇張表現をしたのだろうか。感情を数字で表すことは、「贈汪倫」の詩で、深さ千尺と言っているのと似ている。

「白髮三千丈」の意味は以下の気持ちが届められている。底まで澄んだ美しい秋浦の水。長い船旅の途中に、うつむいて水を眺めていた李白は、そこに、思いがけない白髪を見た。いつ、自分からこれほどに時が失われたのだろう。いぶかしい。川の流れていく方向を眺めると、白髪も共に流れていくようになびいている。李白の愁いは、白髪とともに流れていく。川の流れは、三千丈。その九キロほど、愁いは大きいのであった。(中島龍一)

# 会員の活動

## 三水七歩会の発足―二期と七期合流

三水七歩会 中島龍一

今年の一月に、三水会と七歩会が合併して新しいサークルとしてスタートしています。講師は古田光子先生です。以前から両サークルともにメンバーは十五名ほどでしたが、加齢による健康障害などにより、最近では出席者が半減してしまいました。そのような折に七歩会が、各種事情で休会状態に陥ったため今回のサークル合併となりました。

開催曜日、場所を調整の上、三水会八名、七歩会四名(二名は療養中)で新しく勉強会を始めます。同期会としての慣れた雰囲気は一時的に無くなりませんが、毎回講師以下新しい話題も増えて勉強会を楽しくんでいます。尚、この様な傾向は各サークルにおいて今後進行すると思われれます。



三水七歩会の講師と会員

## 岳精会・千代田岳精会合同勉強会

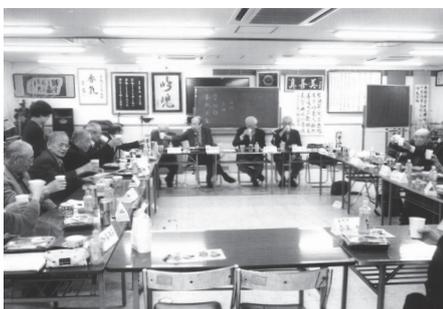
岳精会漢詩研究部 家吉幸二

サークルの横断的活動と相互の交流、勉強会により詩作のレベルアップと共に感性を磨くということを目的に合同勉強会を行った。

四月十日、岳精流総本部に千代田会員九名、岳精会八名が一堂に会し、日頃指導を頂いている四名の先生(三村、桜庭、城田、香取)を招いて詩作を持ち寄り、先生による批評を踏まえて、ディスカッション形式で討論した。尚、岳精会は兼題「晩春閑適」による詩作、千代田岳精会は自由題の詩作だった。

始めのうちは意見も控えめだったが、次第に活発になり、詩題と詩文が合わない、起句と結句が重複の指摘や、漢語と和語、旧字など辞書で必ず確認すること等の指導が続いた。勉強会の後は、弁当とビールで懇親会を開き、自詠自吟の時間が訪れると、喉も滑らかになり交互に十名が朗々と披露した。

合同勉強会は指導の先生方からも参加者からも好評で、今後一年一回程度企画して、漢詩づくりのレベルアップと会員の交流を目指したいと思っと思っています。



合同勉強会後の懇親会

## 奇数月サークル組の第一回交流会

私達はなぜ漢詩と取り組んでいるのか―

九詩期会 山口幸雄

六月十三日、神奈川県民センター会議室で、これまでのバトル漢詩甲子園に代わる交流会を模索する試みとして、「漢詩と私―わたしたちはなぜ漢詩と取り組んでいるのか」というテーマの交流会が行われた。

参加サークルは、奇数月が例会の三水・七歩会(二・七期)、以文会(六期)、八起会(八期)、九詩期会(九期)、十期会(十期)、干支会(十二期)の六団体で、計二十二人が出席。

最初の中島龍一副会長の「作詩は構想から」という講演は、歌謡曲でもなんでも優れたものは参考にして漢詩を作れという、ご自分の経験に基づく話。民謡の「長持唄」や山下達郎の「クリスマス・イブ」を漢詩にした実例を挙げての話には一同感じ入った。

その後の懇談会では、それぞれが漢詩をはじめたいきさつや好きな漢詩、各サークルの状況などを語り合った。懇親会ではさらに親交を深め、「また次回を」と言う声も聞かれる盛況だった。



熱心に聴き入る会員

### 漢詩鑑賞会B新たにスタート

詩游会 川上修己

この漢詩鑑賞会Bは長らく「訳註 聯珠詩格」柏木如亭著・揖斐高校注(岩波文庫)をテキストとして漢詩鑑賞と七言絶句の作詩の勉強を行ってきたが、四月の会にてこのテキストは終了となりました。

その後、テキストを「中国名詩集」井波律子著(岩波現代文庫)に変えて再出発しました。鑑賞会の内容は、テキストの名詩を毎回七首程度輪読・鑑賞することに加えて、これらの詩に各自が次韻した詩を参加者で検討し、さらに指導者が講評することを行っています。初回鑑賞詩と参加者による次韻の一例を記します。

江南春 江南の春 杜牧

千里鶯鳴綠映紅 千里鶯鳴いて綠紅に映ず

水村山郭酒旗風 水村山郭酒旗の風

南朝四百八十寺 南朝四百八十寺

多少樓臺煙雨中 多少樓台煙雨の中

次韻江南春 江南春に次韻す

東郊千里夕陽紅 東郊千里夕陽紅なり

櫻朶搖搖料峭風 櫻朶搖々料峭の風

圓坐花陰樽味足 円坐す花陰樽味足る

落葩一片酒觴中 落葩一片酒觴の中

現在参加者は十三名程ですが更に多くの参加者を期待しております。

### 神辞会グループの活動

好文会 瀧川智志

パソコンやスマホを使って漢詩を楽しむ会として、一昨年少志により活動を開始した「PC漢詩グループ」ではインターネット上の漢詩関連の情報収集と情報交換を行いました。今や、インターネット上には漢詩・漢文情報が満ち溢れ、日々進化し、スマホによって気軽に情報が引き出せる時代であることを再認識しました。

その一年間の活動の成果を踏まえ、昨年九月グループ名を「神辞会」に一新し、水城会長のもとに体制の整備を行い、神漢連の一組織として再スタートしました。引き続き情報収集交換を行うとともに、新たにパソコン・スマホを活用して漢詩作法を取り組みやすいものとするためのツールの開発を開始しました。

現在、作詩に使用する初心者向けの詩語検索ツール、及び、作品の推敲、平仄チェックのための七言絶句推敲ツールの試作中です。検索や規則に基づく評価はコンピュータの得意とする領域であり、作詩の助けになることが期待されます。日頃の漢詩実作で試しつつ改良を加えているところです。本活動に興味のある方のご参加をお待ちしています。尚、「神辞会」は神漢連の詩語の会を意味し、そのツール類を「神辞海」と名付けています。

### 第四回「自詠自書展」開催

— 交流の輪一段と広がる —

今年も神奈川漢詩連盟会員有志による「自詠自書展」が、年次総会に合わせて五月二十五日(土)から五月三十日(木)まで、大佛次郎記念館で開催されました。昨年同様二十一点の展示作品を、東京都漢詩連盟の窪寺会長を始め、多くの皆様にご高覧頂き、盛会裡に終了致しました。幹事一同、大変嬉しく思っております。石川忠久先生を筆頭に多くの先生方の漢詩と書を、地元横浜で鑑賞する機会を持たたことは最大の喜びでした。

幹事の皆様はご高齢の方が多く、それぞれに家庭の事情などを抱えたなかでも、自分の持ち場に責任をもって行動してくださいました。今回の盛会は、チームワークの賜物と深く感謝しております。

漢詩も書も吟も、自分の想いを言葉に乗せて表現することは同じであり、各分野の表現者が一体となれば、お互いにさらに大きな力を発揮できると思います。今は小さな力でも、四回の経験をもとに、神漢連の皆様とともにさらに発展していくことを願っております。

(上田尤子)



窪寺先生ご高覧

### 柏梁体活用のお勧め

詩游会 新井治仁

「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」が神漢連の motto だが、学びと遊びを同時に体験できるのが柏梁体聯句で、これをみんなで楽しんではと思います。詩游会では例会以外で吟行会、忘年会など行事の詩題に合わせ、ゲストも含めて投稿形式で取り纏め折々の想い出作りに役立てています。

本来は、集りの全員が予め同じ韻に属する別な語をくじ引きして七言一句をこしらえ、句末同韻の聯句に仕立てるのですが、我々は、石川忠久先生の「七絶を作るに先立ち、七言句の練習として」(「漢詩を作る」)を考慮し、後日投稿し、住田先生に纏めていただき、各々七絶に発展させるやり方です。

平仄無視で自由に詠めるのですが「句の切れ方」だけは上四・下三を厳格に守っています。また、人数も漢の武帝由来の二六名には足りないのので、一人で二〜三句を作るなど、状況に合わせて工夫しています。勿論上級者の方々は即興即座で楽しまれてるわけですが、酒食や風景を楽しみながら、一句を肴に詩論を戦わせ、後日の投稿に備えるのも一興ではないでしょうか。

各サークルで独自の手法と趣向を盛り込んでやってみてはいかがでしょう。

### 酒匂川「治水神禹王碑」「瀬戸酒造」

#### 「瀬戸屋敷」吟行会

詩游会では毎年漢詩史跡への吟行会を実施しており、一泊旅行も含め、鑑賞、実作、交流を楽しんできました。今回三月十九日、板本さんの企画で、早咲き桜満開の酒匂川堤に沿い、南足柄開成町の福澤神社「禹王碑」と古民家「瀬戸屋敷」及び瀬戸酒造を訪ねた。

・治水神禹王碑：黄河の治水を辛苦の末達成した夏王朝の聖王にちなみ、富士山の宝永大噴火後の治水工事後、川の東西両岸に建立。

・瀬戸酒造：地酒製造を目の当たりにし、二十種近い試飲でホロ酔い。

・瀬戸屋敷：桃源郷の様な再生古民家で、爛漫の桜のもと、禹王碑等のレクチャーを受け、地産の「郷弁」を頂き、お酒をお茶代わりに懇談した。竹林舎、詩游会、以文会、三水七歩会、八起会、九詩期会、清閑亭理事などの参加者により、漢詩作りのほか各自のこれ迄の歩みなど、活発な意見交換が行われ、新たな知己・知見を得ることが出来た。

後日投稿の柏梁体連句(住田先生批正の三部作の一部)を紹介します。

#### 訪瀬戸大酒造觀櫻 (上平支韻)

櫻樹花陰春恨滋 桜樹の花陰 春恨滋し 板本  
紅雲鳥語却坐悲 紅雲鳥語 却って坐に悲し 浜辺  
春入櫻花香氣吹 春に入り 櫻花 香氣吹く 森川  
爛漫櫻枝映日垂 爛漫たる桜枝 日に映じて垂る 古田

忽開忽落客須追 忽ち開き忽ち落つ 客須く追うべし 池上  
櫻花舞落濃掃眉 櫻花舞い落ち 濃やかに眉を掃く 横溝  
奇妙清酒盛名馳 奇妙の清酒 盛名馳せる 山口  
八種酒法學先師 八種の酒法 先師に学ぶ 川上  
櫻花陶然酒與詩 櫻花陶然 酒と詩と 平賀  
足柄佳釀傾酒厄 足柄の佳釀 酒厄を傾く 俣野  
酌酒交歡櫻花姫 酒を酌み交歡す 櫻花の姫 鈴木  
詩飲微醺自相宜 詩飲微醺 自ら相宜し 新井  
宴筵方願泛觴池 宴筵方に願う 池に泛觴せんことを 香取  
低吟微醉遶村娛 低吟微醉 村を遶りて娛む 大森  
土産珍羞共酒持 土産の珍羞 酒と共に持す 横溝

(詩游会 川上・新井)



瀬戸屋敷での満開の桜の下、集合写真

# 会員だより

## 郷土の偉人 安井息軒先生

以文会 大石加代子

宮崎県の偉人といえば、私にとつてはやはり幕末の大儒といわれた安井息軒先生が第一に思いだされます。幼名仲平さんは、生まれながらの小男でおまけに天然痘にかかり、その為に大痘痕<sup>あはた</sup>ができ右目も潰れ、仇名は「猿」と呼ばれていたそうです。寛政十一(一七九九)年現在の宮崎市清武町に生まれ、二十一歳の時篠崎小竹の塾で学び、二十六歳で江戸の昌平黌に学んだ。田舎者で醜男のため、先輩・同僚からも馬鹿にされ、からかわれたりするなか、夜も寝ずに勉強に励み、二十八歳の時、日向飢肥藩<sup>おび</sup>主の侍読に任ぜられ、六十三歳で昌平坂学問所の教授となる。七十七歳(明治九年)江戸で死去、墓は文京区の養源寺にあるということです。

吉川幸次郎先生はその著「息軒先生遺文続編」の序の中で「息軒先生が江戸時代の漢学者のうち、もつともすぐれた一人であること。ひとり日本のみならず中国においても尊敬されていること。」を述べています。

尚、安井先生の数々の著作は慶応義塾大学に安井文庫として公開されています。

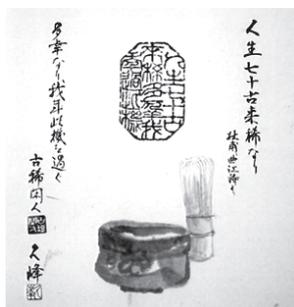
## 漢詩と篆刻

詩游会 横溝喜久男

「篆刻」は石や木などの印材に名前や雅号、自分の好む字句を刻み、書や水墨画作品には無くてはならない印として知られています。古来より「方寸の中に宇宙を宿す」と言われ小さくとも密度の高い、奥深く味わいのある作品が求められています。現在ではこの篆刻印が芸術表現の一つとされ、作家が精一杯の心情を注ぎます。私も此の意に沿って創作するよう心掛けています。

「漢詩を篆刻で表現する」。これは漢詩教室に通い、自分の思いが作品に表現出来る様になった頃より強く感じるようになりました。一句七文字や絶句二十八文字を決められた寸法の中に表現するには、画数が多い複雑な文字をいかに配字するか苦慮するところです。この配字が巧くいき刻し終えた時には本当の意味での醍醐味を覚えます。

平成の初めより水墨画に押す名前印等を作り始めてから、幾人かの師の指導を受けつつ、今日までに刻した印影も六百五十余箇。稚拙な出来に苦笑しその時々、その思いに浸り乍ら、これからの方寸に思いを込めて刻し続けて行きたいと思っています。



篆刻の作品

## 「こんな楽しい、漢詩との生活を」

もっと、PRしませんか！

三水七歩会 鈴木正敏

七期生として、新聞広告の「漢詩の講習会募集」を見て、会員になりました。

この素晴らしい漢詩の世界とは、全く無縁の会社生活を四十数年余。その後は「会社員ではない働き方で、社会とつながる仕事」をしたいと考えて、神奈川県立歴史博物館・横浜開港資料館のボランティアを十年間ほど体験しました。漢詩とは、古希を迎えた時が第一歩でした。もう、人生の卒業も間じかのこの頃です。勉強を始めたのが遅すぎた。日々反省をしながら苦勞を楽しんでいる昨今です。

いまや俳句は、若者に大人気！ スマホやPCの活用で、花鳥風月を愛で、君主政治の理想を説く漢籍の文言とはヒトコト異なる令和の新時代にふさわしい和風の価値観・叙情の世界を探検する面白さも、ぜひ味わいましょう。

みなさまに会員増強のための、ヒトツ提案があります。二年後の十五周年に向けて、今年から会員全員が広告塔になってみませんか。これからリタイアする大量の六十代の後輩たちや、みなさんの周辺の友人をターゲットとして、この機会に、漢詩への「ともだち勧誘作戦」を展開してみましょう。活力のある若い会員を継続的に増員し、ますます老若でより愉快に、神漢連の「漢詩の世界」をお互いに大いに遊びかつ楽しみましょう。

台湾便りその二―台湾は多言語国家

三水七歩会 山岡健郎

劉さんは国文学の元大学教授である。壁には漢詩の書や絵が飾られている。劉さんは日本語も堪能で、私の拙い中国語と美味しいお茶をいただきながら会話が弾む。

台湾は多言語国家で、地下鉄の車内放送は、北京語・台湾語・客家語・英語だ。台湾語客家語は中国語の方言であるが、劉さんは漢詩を読むには客家語が良いと言う。古くに台湾に福建省や広東省から来た人々の言葉だ。古い発音が残り、声調は六声、北京語では消えた入声もある。静夜思を、北京語と客家語で読んでもらう。私が日本語の音読みで読むと、客家語に似た音が多いではないか。劉さん曰く、日本語にも中国語の古い音が残っているので、読み下しだけでなく、音読みで読むと詩のリズムや韻が理解できると言う。

今住んでいる新竹縣は八割が客家人で、独特の文化を保っている。乾隆帝時代の家が残り、なんと今でも人が住んでいる。味付けは鯉出汁と醬油で口にあい、我々にはありがたい。彼らは華僑として世界中に出て行った人々で、教育熱心で進取の精神にあふれ、李登輝などの政治家も多い。劉さんも客家人だが、祖父は、台湾に十六ある原住民の一つ、タイヤル族だった。「俺のじいさんは首狩りしておったんよ」と言つて、ニヤリと笑う。本当かよ。怖いよ、劉さん。

第六回漢詩朗読・創作発表大会

主催 桜美林大学孔子学院 以文会 大森冽子

平成三十一年一月二十六日に相模原市の桜美林大学淵野辺キャンパスで開催された。

冒頭、佐藤保先生(お茶の水女子大学名誉教授・二松学舎大学名誉教授)による「マリア・ルス号事件と漢詩」と題する大旆に記された事件に起因する三十三首の漢詩の興味深い講演がありました。

明治五年に清国人の契約労働者に乗せたペルー船籍の船が台風に遭遇して、修理のため横浜に入港する。清国人は奴隷として扱われていた為、その一人が脱出して助けを求めた。日本に裁判権がある事から、大江卓が裁判官となって、ペルー船籍の契約は違反とし、清国船員二百二十九人を開放した。此の事に在日華人が感謝の詩を綴った大旆を大江卓と副島種臣に贈答した(大旆は神奈川県立図書館所蔵)。大旆の漢詩一首を紹介する。

指日高陞

巍巍高義聳雲霄 魏々たる高義雲霄に聳え  
拯溺扶危志不搖 溺るるを拯い危うきを扶けて

志は揺るがず

貧旅呼號山寂寂 貧旅呼号すれども山は寂々  
征夫困餓水超超 征夫 餓えに困しむも水は超々  
未逢良吏情難白 未だ良吏に逢わざるとき情白し難く  
得遇仁人恨始消 仁人に遇うを得て恨み初めて消ゆ

二百餘生如再造 二百余生再造せらるるが如し  
塩梅欣羨作羹調 塩梅欣び羨まれん羹調を作すを

六回目の今大会は画期的に参加者が多く、小学生、桜美林大学孔子学院の生徒さんから九十歳の高齢者まで。応援の保護者、学生さん多数で会場は満員。今回も神漢連会員は大活躍でした。

朗読の部では室橋幸子さんが李白の「春夜洛城聞笛」を書道吟で優秀賞に、創作の部では岡田泰男さんが最優秀賞に、板本健作さんが「櫻貝」で優秀賞に、志村典子さんが「巡遊忍野八海」で審査員特別賞に輝いた。



岡田泰男さん最優秀賞受賞

座間谷戸山公園写望

岡田泰男

此地四時相水清 此の地四時相水清し  
獨磨吟骨肆吟行 独り吟骨を磨して吟行を肆にす  
澗田茅葦燒無盡 澗田の茅葦焼けども無尽  
渚岸菖蒲耘復生 渚岸の菖蒲耘も復生す  
野老傾聽松杪籟 野老は傾聴す松杪の籟  
村童溢喜狗兒聲 村童は溢喜す狗兒の聲  
連山似浪遮天際 連山 浪の似く天際を遮り  
富嶽不看寧有情 富岳 看えざるは寧ろ情有り

# 小特集 令和の年賀状に 漢詩を載せよう

## 特集のねらい

漢詩を習い始めると、年賀状に自作の新年漢詩を載せてみたいと思っっている方は多いと思われる。特に、来春は令和初の賀正となり、漢詩を載せるのに相応しいと言える。

この為に本小特集は、平成三十一年の賀状に記された代表的な漢詩を紹介し、参考に供するものである。賀状の漢詩題目としては、新年に当つての所感(窪寺啓先生、玉井・古田・住田先生)、自分の近況(岡崎前会長)、昨年の旅行などの思い出(高津事務局長)、等々と多種多様である。尚、令和を慶祝する詩を載せたいと思われる方にとっては、二松詩文会が本年夏に慶祝詩の特集を行う予定であり、参考にすると良いと思われる。

(香取和之)

窪寺啓先生玉韻

宸題光恭賦

宸題光恭しく賦す

開年旭日出天池

開年旭日天池を出で

五彩祥雲映碧漪

五彩の祥雲碧漪に映す

四望昭昭瑞光裡

四望昭々瑞光の裡

偏希己亥太平彌

偏に希う己亥太平の彌さを

新年偶成

前神漢連会長 岡崎満義

野翁八十欲何求

八十過ぎレバ童子ト同じ

醉月迷花詩酒遊

花鳥風月ニ酔イ遊ブ

内笑頑僊壮志盡

酒呑童子ト笑ワレナガラ

童心得保楽風流

コレゾ風流ト強ガツテミル

奉賀踐祚大典

玉井幸久

穆穆神州祥氣盈

穆穆たる神州に祥氣盈ち

玄玄宮闕瑞雲縈

玄玄たる宮闕に瑞雲縈る

天嘉皇統無窮德

天は嘉す皇統無窮の徳

地與邦家萬世榮

地は与す邦家万世の榮

(語釈)実際の年賀状では語の下に括弧付の小さな字で書かれているが、会報では誌面の関係で別記とする。穆穆：やわらぎうるわしい。祥氣：めでたい気。玄玄：おく深い。宮闕：宮城。瑞雲：めでたい雲。邦家：わが国。

元旦偶成

古田光子

旭日瞳瞳氣色新

旭日瞳瞳気色新たなり

社前參集賀正人

社前参集す賀正の人

簫聲劉唳洗心處

簫声唳心洗う処

先禱平安己亥春 先づ平安を祈る己亥の春

己亥新禧

住田笛雄

富嶽遠望村社春

富岳遠望す村社の春

盛装行列賽神人

盛装行列賽神の人

鳴鈴拍手願多幸

鈴を鳴らし手を拍ち多幸を願う

淑氣融和旭日新

淑氣融和し旭日新たなり

陽關遺跡

高津有二

茫漠平沙路更西

茫漠たる平沙路更に西す

天涯要塞跡齊齊

天涯の要塞跡斉斉たり

陽關三疊獨吟詠

陽関三疊独り吟詠すれば

寂寞四邊斜日低

寂寞たる四辺斜日低る

昨年九月、中国漢詩ツアーで西安・敦煌を訪ねました。陽関の遺跡での独吟、鳴沙山麓の駱駝乗り、異国で初めての中秋の明月など思い出は尽きません。本年は喜寿を迎えますが、お蔭様で心身共に健康で、元気にやっております。



# 特別寄稿 平成は漢詩とともにあった



神漢連前会長  
岡崎満義

一九九九(平成十二)年、三十九年つとめた出版社をリタイアした。基本的に「終身雇用・年功序列」で守られてきた会社から社会に移行してよいよ自立の時が来たと思つた。「自立」のために何をしたらよいか。

まず、料理が作れるようになること。妻にしばらく手ほどきを受けた。おかげで今は新聞に載っている料理のレシピを見ればだいたいい何でも作れるようになった。

次に自分の住む街を知り、なじみを作ること。ちょうどリタイアに合わせるように「市民活動推進検討委員会」の委員を茅ヶ崎市が公募していたので、そこにもぐりこんだ。市が月に一回、マイクロバスを仕立ててくれて、近くの市民活動の先進地区——横須賀、鎌倉、藤沢、三鷹、武蔵野市などを見学して回つた。二年間で答申書をまとめ、この活動

は終つた。

さて、次は？ と考えているうち、偶然、朝日カルチャーセンター横浜に窪寺啓先生の「漢詩実作講座」があるのを見つけ、何となく習つてみようかと申込んだ。二〇〇二(平成十四)年四月のことである。学生時代に吉川幸次郎先生の「中国文学史」の講義を一年間受けて、以後、吉川先生の「新唐詩選」「人間詩話」をはじめ先生の著書はよく読んでいた。並行して竹内好の中国論もよく読んでいた。いつて漢詩を自分で作ろうとは思つてもみないことだった。ほんの気まぐれで窪寺漢詩教室に入門したようなものだった。

作詩欲學有良儔 作詩學ばんと欲すれば

良儔(よき友)有り

文化中心在驛樓 文化中心は驛樓(駅ビル)に在り

師弟因縁無限好 師弟の因縁限り無く好し

鷗盟共樂小風流 鷗盟(詩の仲間)共に楽しむ小風流

授業は月二回、第一・第三金曜日の午前十時半から十二時まで。受講生は一首か二首提出して、窪寺先生に添削してもらう。まじめできびしい先生であった。その頃、親友のジャーナリストS君が精力的に地方の取材を続けていた。彼は「県知事や市長はまずまずの人物がほとんどだが、村長の中にはとてつもなく面白いスゴい人物がいる。ふしぎなことだが、取材しているとそれが実感だ」と言つた。私は窪寺先生は「漢詩村のスゴい村

長さん」と思つたものだ。漢詩は絶滅危惧種、限界集落にちがいないが、窪寺先生のようなスゴい村長さんがいるかぎり、絶滅することはない。

窪寺漢詩教室のクラスメイトに中山清、田原健一、磯野衛孝、酒井謙太郎、城田六郎、桜庭慎吾、圓谷照男…の諸氏があり、二〇〇六年に神奈川県漢詩連盟を作ることになつた。このうち中山、田原、酒井さんはすでに鬼籍に入られた。

憶中山清先生 中山清先生を憶う

博學多才前半生 博學多才前半生

近年金港盛詩名 近年金港(神奈川)詩名盛んなり

春風駘蕩平生態 春風駘蕩平生の態

耳底猶留溫雅聲 耳底猶お留む温雅の声

二〇一二(平成二十四)年に酒井謙太郎さんが「素庵閒情集」という素晴らしい漢詩集を出版された。その中に、先年私が岩波書店から刊行した「人と出会う」という編集者時代に取材した人たちを書いた著書を酒井さんに差上げたところ、それについての詩が載つた。

讀詩友岡崎氏新刊書「逢人」

藝文學術幾人豪 芸文學術幾人かの豪

面語成章縱銳毫 面語章を成し銳毫を縦いままにす

方識無餘描聲咳 方に識る聲咳を描いて余す無きを

東都紙價定逾高 東都の紙價定めて逾いよ高からん

私はこの詩集をいただいて、一首作った。

見贈酒井謙太郎詞兄詩集

老翁此日板行初 老翁此の日板行(出版)の初め  
文質彬彬俗韻疎 文質彬彬(詩は素晴らしい)俗韻は疎なり

詞藻縦横足風雅 詞藻縦横 風雅足る

金河大隠自如如 金河の大隠  
自から如々たり(思うまま)

城田六郎さんの初鰹を詠んだ詩が教室で披露された。

初鰹魚

嫩緑薫風杜宇啼 嫩緑薫風 杜宇啼く  
乗潮翠鬣上從西 潮に乗り 翠鬣(ひれ)西(より)上る  
添齋炙膾垂涎處 齋を添え 膾を炙り 涎を垂す処  
戲道都人爲典妻 戯れに道う 都て人は為に妻を典す

いい詩だったので、これに習って一首作った。

讀城田六郎詞兄詩初鰹魚有感

旨酒鮮魚暑可忘 旨酒(うま酒) 鮮魚 暑忘るべし  
典妻多啖庶民望 妻を典して(質に入れる)  
多く啖うは庶民の望み  
如今草食男兒異 如今草食男兒は異なる  
肉食佳人欲典郎 肉食の佳人(女子)は郎を典せんと欲す

漢詩は志を詠み、自然をうたうのが王道だと言われ、私もそう思う。ところが、雑誌編集者を長年つづけたせい、ついつい時事、人事の方へ目が向く。私とともに今の時代を生きた人、同時代人を読むことが多くなる。

宇宙探查機隼歸還

七載飛船無限程 七載飛船 無限の程  
晦冥宇宙苦長征 晦冥の宇宙 苦しき長征  
喜聞拾得絲川空 喜び聞く 拾い得たり  
糸川の空(ちり)

勿忘歸來隼盛名 忘る勿れ 歸り來たる隼の盛名

これに戯訳をつけて遊んだ。

宇宙ヲブラリ ヒトリ旅  
七年ヤット 里ゴコロ  
イトカワノチリ チョト手ミヤゲニ  
ウレシイ生還 佳キ名ハヤブサ

私は一九八〇(昭和五十五)年に発行された総合スポーツ誌「ナンバー」の創刊編集長をしたこともあって、スポーツにも詩の題材を取ることが多かった。

寄舉重三宅宏美選手

静閑決皆鐵輪前 静閑皆を決す 鉄輪の前  
脚震頰膨高舉全 脚震え頰膨らみ 高く挙げて全し  
恰見千斤拔山力 恰かも見る千斤山を抜く力  
破顔少女聳雙肩 破顔の少女 双肩を聳かす

日本文学研究者のドナルド・キーンさんが日本国籍を取得したとき一首作った。

聞鬼怒鳴門先生取得日本国籍

美國郎經六十春 美国(アメリカ)より郎は経る六十春  
扶桑文雅更加新 扶桑の文雅更に新を加える

喜聞歸化九句意 喜び聞く 歸化九句の意  
鬼怒鳴門名可親 鬼怒鳴門名親しむべし

先日、キーンさんが亡くなられたと知り、この詩をふまえて又一首作った。

憶鬼怒鳴門先生

鬼怒鳴門名可親 鬼怒鳴門名親しむべし  
喜聞歸化雅才人 喜び聞く 歸化雅才の人  
扶桑文學能傳世 扶桑の文學 能く世に伝う  
何赴清魂告別晨 何くにか赴く 清魂告別の晨

こうしてふり

返ってみると、  
どうやら私の平成は漢詩とともにあったといえそう。その道を開いてくださった窪寺啓先生にはいくら感謝しても感謝しきれない。



# 漢詩と私

城田六郎

私は昭和二十六年に高校を卒業しましたが、在学中に漢文の授業を受けた記憶がありません。古事記に始まり、万葉集、源氏物語等古文の授業が中心でした。それから五十年後、ある会合で窪寺啓先生が漢詩の講座を横浜の朝日カルチャーセンターで開講していることを知り、受講することにした。

カルチャーセンターの勉強と併行して、漢詩集の代表格である唐詩選を読むことになりました。岩波文庫の下巻は、七言絶句のみ百六十五篇が集録されており丁度手頃でした。最初は、起承転結の各詩語の平仄を辞書を頼りに全部調べて、平仄の規則を習得した。それから、語釈欄の説明を読んで、日本語との相違点の多いことに気付かされ、早く漢詩の詩語に慣れることが先決だと痛感した。

次に唐代の詩人の詩集を手あたり次第に読んだ。李白から始まり、杜甫、王維、白居易、柳宗元、杜牧、李商隱、更に宋代の蘇軾、王安石、黄庭堅、陸游に及んだ。最初は詩を理解するのに精一杯であったが、二度三度繰り返し読むことにより、より深くその詩がどのような状況で読まれたかを十分に把握しながら読むように努めた。個人の詩集は作詩の年代



別に編集されたものと、主題別に分離されたものとの二種類に分けられるが、特に前者の場合には、全編を通読することによって、その詩人の全体像に迫ることが可能であろう。

たとえば、杜牧は兵法の書「孫子」二十三篇の注釈書をあらわし兵法に通じていたことを知れば、「題烏江亭」詩の

江東子弟多才俊 捲土重来未可知

の句は自と重みが増してくると思う。

唐代の詩の選集には、唐詩選のほかに「三体詩」がある。この選集の特色は、唐詩選に収録された詩とほとんどダブリがないこと、また単に唐詩を選んで集録しただけではなく、それによって詩の原理、規範をあらわそうとしていることである。詩の選集はただ読むだけでなく、作詩の手本という性格を備えており、「三体詩」はその点を特に強調しており分りやすく示されている。転句は起句、承句と全然違った方向から、新しい場面を展開する。転句の転換があるからこそ、四句と

いう短い詩型でありながら、変化に富んだ奥行きのある表現が可能となる。絶句のときばえの如何は、転句にかかっていると主張している。

詩を作り始めの頃は、花鳥風月を詠ずることが中心であるが、その時もつとも参考になったのは、石川忠久先生の「漢詩をよむ」春夏秋冬シリーズであった。各篇それぞれ百篇の名詩を収めている。「春の詩」を例にとれば、春分、清明等十一の項目に分けられ、各項目は十篇前後の詩が掲載されている。自分が作りたい詩の内容に該当する項目の中の詩にヒントを求めることができる。

詩ができあがっても、それで一件落着きとはいかない。推敲は必ず行うべき手順である。頼山陽の代表作である「泊天草洋」に例をとってみよう。

雲耶山耶吳耶越 水天髣髴青一髮  
萬里泊舟天草洋 煙橫篷窓日漸沒  
瞥見大魚波間跳 太白當船明似月

次の元の詩と比べてみよう。

眠鷺船底響寒潮 天草洋中夜繫纜  
太白一星光如月 波間照見白魚躍

スケールの大きさ、躍動感が加わって一層印象の深い作品に生まれ変わっている。

神漢連会員「平成三十年度扶桑風韻漢詩大会」で活躍

秀作

陶靖節舊居

陶靖節の旧居

九日清風佛曙烟

九日の清風曙烟を払ふ

潯陽舊屋菊花鮮

潯陽の旧屋菊花鮮やかなり

緬思有晋陶徵士

緬思す有晋の陶徵士

守拙躬耕心晏然

拙を守りて躬耕し心晏然たるを

小嶋明紀子

入選作品

秋日閑居

秋日閑居

三間茅屋映斜陽

三間の茅屋斜陽に映じ

籬落幽叢菊又黃

籬落の幽叢菊又た黄なり

去歲手栽松樹畔

去歲手づから栽うる松樹の畔

來春更葺小文房

來春更に葺かん小文房

杉森千枝子

村里蝸廬

村里蝸廬

暖曖村墟日欲沈

暖々たる村墟日沈まんと欲す

歸鴉三兩入寒林

歸鴉三兩寒林に入る

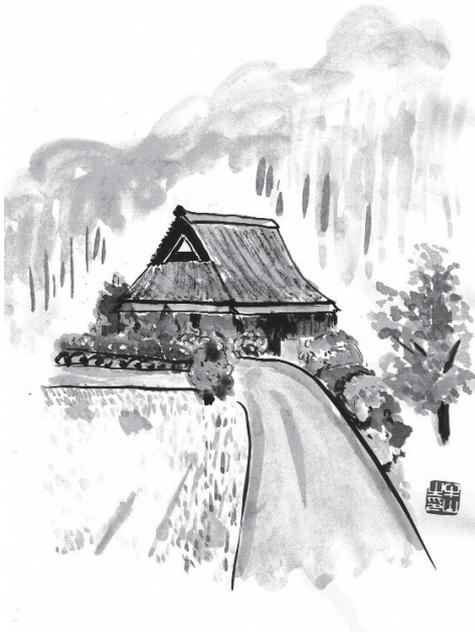
蝸廬猶得柴桑趣

蝸廬猶おたり柴桑の趣

酌酒敲詩丘壑心

酒を酌み詩を敲く丘壑の心

水城まゆみ



本会員の横溝喜久男さんから、立派な会長印を寄贈頂きました。



神奈川縣  
漢詩連盟  
會長之印



令和元年の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう！

詳細は、グーグル等で各大会を「検索」。

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページから入手できます。

●令和元年度全日本漢詩大会・香川大会

十月十八日 高松市

詩題 「道・路・径にかかわるもの」、自由題も可

応募完了

●令和元年度全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会

自由題

応募期間 九月一日～十一月三十日

応募資格は全漢詩連盟正会員及び準会員

●第二十二回全国ふるさと漢詩コンテスト

十二月八日 表彰式 多久市

詩題 「廟、寺、祠(神社)」

応募締切 八月三十一日

●第四回漱石記念漢詩大会

十二月七日 熊本市

自由題

応募完了

●第十一回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月十六日・十七日 三条市

自由題

応募期間 七月一日～八月三十一日

# 神奈川県漢詩連盟 今年の行事予定

## ●研修会

期 日 ①令和元年十月二十三日(水) ②十一月七日(木)

③十一月十二日(火)(予備日)

時 間 午後一時～午後五時

場 所 神奈川近代文学館中会議室

参加申込 本会報同封の用紙をご利用下さい。尚、詩稿の締め切りは九月末日。

## ●吟行会

期 日 令和元年十一月六日(水)

場 所 大磯 鳴立庵、島崎藤村邸、大内館他。

会 費 三五〇〇円(大内館での昼食込)

参加申込 本会報に同封の詳細案内を参照下さい。

## ●漢詩講演会

期 日 令和元年十一月十三日(水)

時 間 午後二時～午後四時

場 所 神奈川近代文学館ホール

講演者と演題 横浜国立大学準教授 高芝麻子先生 「漢詩の四季 日本の四季」

参加申込 不要。会員以外も参加可能。無料。

## ●台湾漢詩ツアー

訪問先 高雄(澄清湖他)、台南(赤嵌樓、安平古堡、孔子廟)、台北(故宫博物院、

台北郊外観光他)。また台湾漢詩団体との漢詩交流を予定している。

期 日 令和元年九月八日(日)～十一日(水)

費 用 約十五万円(税込)、最少催行人員十六名。

参加申込 六月末で一応締め切っていますが、高津事務局長(046-2333-

7641)にご相談下さい。

## 編集後記

令和になって初めての「神漢連会報」をお届けします。

会報二十五号では、新元号「令和」に因み二つの企画を行いました。一つは岡崎前会長から「平成は漢詩とともにあった」(十二、十三頁)という、平成を振り返った特別寄稿を頂いたことです。また来春は令和初の賀正であり、「令和の年賀状に漢詩を載せよう」(十一頁)との題で小特集を組みました。年賀状に漢詩を載せようと考えている方にとって、参考になれば幸いです。

五月二十九日の総会後の市川桃子先生の講演会「李白『白髮三千丈』」は大好評でした。何故、「白髮三千丈」なのか、先生のお話を伺って、驚いたり、なるほどと納得したり、夜の懇親会はこの話で持ち切りでした。先生の講演会に出席されなかった方は、本誌四、五頁でその感動を味わって下さい。

また、「会員だより」(九、十頁)など、盛りだくさんの記事です。お楽しみ下さい。

本誌のモットーは、会報二十二号(平成三十年一月)の編集後記でも申し上げたように、「会報でしか神漢連と繋がっていない一般会員に、神漢連会員であることのメリットを感じ、今後神漢連の多くの行事にも参加して頂けるようになること」です。どうぞ宜しくお願い致します。

尚、挿絵は故・田原健一副会長と牛山知彦さんの作品です。  
(香取和之)